

(実践報告)

ロールプレイ演習及びコミュニケーション援助技術を導入した 在宅看護演習における学生の学び — 振り返りレポートの内容から —

加藤 輝¹⁾ 村山晃子¹⁾ 北野淑恵¹⁾ 中村廣隆¹⁾ 榊原千佐子¹⁾

I. はじめに

看護教育における在宅看護論は、人口の高齢化や疾病構造の変化、医療施設から在宅ケアへの移行、老人訪問看護ステーションの開始などの背景から、1997年のカリキュラムより在宅看護論が新設された(厚生労働省, 1996)。2008年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則(以下「指定規則」)の改正では、在宅看護論は、地域で生活しながら療養する人々とその家族を理解し、在宅での看護実践の基礎を学ぶ内容とするほか、終末期看護も含め、在宅での基礎的な看護技術を身につけ、他職種と協働する中で看護の役割を理解する内容として統合分野に位置づけられた(厚生労働省, 2007)。そして2020年の指定規則の改正では、地域で生活しながら療養する人々とその家族を理解し、地域における様々な場での看護の基礎を学ぶ内容とし、統合分野にあった在宅看護論は、地域・在宅看護論へと名称が変更し、基礎看護学の次に位置付けられた(厚生労働省, 2020)。地域・在宅看護論は病院の中での看護と訪問看護を代表とする地域での看護の間にある、入院患者にむけた退院支援、介護保険のケアマネジメントといった医療保険や介護保険の仕組みの中で展開される看護実践や、地域で暮らす人々との交流から生まれる自助や互助の支援関係を育てていくといった看護実践が重要であり、そこに向けられる期待は大きいとされている(山田, 2022)。

そのような中で本学の在宅看護演習は、「在宅看護の実践に必要な態度とコミュニケーション能力を身につけ、在宅療養者とその家族の生活、健康上の課題を踏まえた在宅の看護過程が展開できる」という目的のもと、全15回の講義を実施している。このうち、6回は在宅看護実習を想定し、2021年から在宅における面接技術演習(以下、ロールプレイ演習)と在宅コミュニケーション援助技術演習(以下、コミュニケーション援助技術演習)を取り入れている。前者では、主に訪問看護師に必要なマナーや対象者との関わり方、自宅に訪問して看護を行うイメージづくり、実習に向けて必要な学習内容や態度について学ぶことを目標としている。後者では、主に対象者が多様な価値観やニーズをもっていることを学び理解すること、療養者とその家族を取りまく環境やそれぞれの立場の考え方や思いを考えること、療養者や家族へのコミュニケーションの実際を考え、配慮すべき点や対応のポイントについて学ぶことを目標としている。本学ではこれまでに、村山らが在宅看護実習における学びを質的に分析し、新カリキュラムである「地域・在宅看護論」としての学びを深めるために、地域包括ケアシステムの内容をより学べるような実習内容や実習方法の検討が必要であることを述べているが(村山ら, 2020)、在宅看護論の講義や演習についての振り返りは十分ではない。在宅看護実習における学生の学びを充実させていくために、実習を想定したロールプレイ演習やコミュニケーション援助技術演習を通して学生が何を学んだかについての振り返りが必要であると考え、そこで今回、上記の演習を実施したことによる学生の学びについて報告する。

1) 朝日大学保健医療学部看護学科(公衆衛生看護学講座)

II. 在宅看護演習の概要

1. ロールプレイ演習およびコミュニケーション援助技術演習の日程

表1 ロールプレイ演習およびコミュニケーション援助技術演習の日程

月日	時限	グループ	演習内容	グループ	演習内容
4月22日(金)	1時限	A	ロールプレイ演習	B	コミュニケーション援助技術演習
			グループワーク (シナリオ作成)		グループワーク (事例検討・シナリオ作成)
	2時限	A	ロールプレイ演習	B	コミュニケーション援助技術演習
			ロールプレイ発表		実演
5月6日(金)	1時限	A	コミュニケーション援助技術演習	B	ロールプレイ演習
			グループワーク (事例検討・シナリオ作成)		グループワーク (シナリオ作成)
	2時限	A	コミュニケーション援助技術演習	B	ロールプレイ演習
			実演		ロールプレイ発表
5月13日(金)	1時限	ロールプレイ演習 発表 (各4G)			
	2時限	コミュニケーション援助技術発表 発表 (各4G)			

注1 グループA・Bは3年生の全人数92人を半分(46人)に分割した。各演習におけるグループワークはさらに7～8人のグループに分けて実施した。1グループがロールプレイ演習を行っている裏で、もう1グループがコミュニケーション援助技術演習を行うという計画とした。

注2 ロールプレイ演習およびコミュニケーション援助技術演習の発表は、3年生全体を7～8人のグループに分けた全12グループの中から、それぞれ4グループが発表を行った。また、1つのグループがロールプレイ演習およびコミュニケーション援助技術演習の2つの発表を行うことがないように設定した。

注3 5月13日のロールプレイ演習の発表は、4月22日および5月26日の2限に実施したロールプレイ発表の際に、当日発表担当となるグループが発表内容を録画したものを視聴した。コミュニケーション援助技術の発表はその場での実演とした。

注4 ロールプレイ演習とコミュニケーション援助技術演習を行う講義室が異なるため、公衆衛生看護担当の教員の協力を得て、各教室に2名の教員が配置されるよう配慮した。

2. ロールプレイ演習の概要

ロールプレイ演習の概要を表2に示した。ロールプレイ演習では訪問時のマナーや態度、療養者・家族と信頼関係を築くための関わり方に関する学びを重きに置いているため、発表時の血圧測定の実施は行わないこととした。また、ロールプレイ演習の課題を明示したが、学生の考えや発想を尊重できるように、細かい内容までは明示しないこととした。

表2 ロールプレイ演習の概要

学修目標
<ul style="list-style-type: none"> ・訪問時に必要な看護師の関わり方やマナーについて理解できる。 ・療養者や介護者の気持ちを考え、看護師と療養者・家族の「信頼関係」を築くための方法、説明の仕方、コミュニケーションありかたについて考え、ロールプレイ実演を行う。 ・在宅で療養生活を送ること、在宅に訪問して看護することについてイメージし、訪問看護への理解を深める。また訪問看護実習に向けて必要な学習内容や態度・マナーについて学ぶ。
事 例
<p>朝日太郎さん（82歳、男性）、妻（76歳）と2人暮らし。脳梗塞により左片麻痺が生じたため、6カ月間入院し、リハビリテーションを受けていた。杖をつけて歩行できるまでに回復したため、自宅へ退院した。入院中に介護保険を申請し、要介護2の認定を受けた。医師からは下記の理由から訪問看護の利用を検討してほしいと話が合った。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 血圧が不安定になることがあるため、週1回程度血圧測定し、医療的な管理をした方がいい 2. 老夫婦2人暮らしのため、脳梗塞後遺症のある生活の仕方や心情を相談できると良い 3. 在宅ではリハビリの機会がなく、歩行が困難になる可能性があるため、リハビリテーションの支援をしてもらえると良い <p>そのため朝日さんは、週1回訪問看護を利用している。</p>
家族歴
<p>朝日太郎（82歳）： 定年前は小学校教諭だった。75歳まで町内会の役員をしていた 高血圧の既往があり内服治療を行っていた 趣味は囲碁で、脳梗塞発症前は公民館で行われている囲碁クラブに参加していた 認知症はないが、やや難聴である</p> <p>朝日花子（76歳）： 太郎さんの妻である。基礎疾患はないが体が丈夫な方ではない</p> <p>長女（48歳）： 太郎夫婦宅から車で2時間の所に家族で居住している</p> <p>長男（45歳）： 家族とともに東京で暮らしている</p>
訪問時の状況
<p>4回目の訪問であり、実習のため看護学生も同行している。前の訪問宅で時間がかかり、訪問予定時間より10分遅れてしまっていた。</p>
ロールプレイ演習の課題
<ul style="list-style-type: none"> ・訪問で必ず行う援助として、血圧の測定結果（測定値162mmHg/80mmHg）の報告、最近の状況確認、妻への介護状況確認を行い、挨拶して退出するまで（実演時間5～6分）のシナリオを作成する。 ・訪問看護時の話題として、何かしらの生活上の情報収集・提案・指導説明等を加えたシナリオを作成する。
シナリオ作成時の注意事項
<ol style="list-style-type: none"> ①訪問看護師や同行する学生に必要な関り方やマナー ②在宅療養、または在宅介護をしている療養者や介護者の気持ち ③相手を尊重し信頼関係を築くための行動として特に考慮すべき点 <ol style="list-style-type: none"> ①～③を考慮してシナリオを作成し演じる

3. コミュニケーション援助技術演習の概要

コミュニケーション援助技術演習の概要を表3に示した。コミュニケーション援助技術演習では、在宅看護において必要な「生活スタイルを尊重する」コミュニケーションや、看護だけでなく、療養者や家族を取り巻く多職種の立場を理解できるような事例とした。

表3 コミュニケーション援助技術演習の概要

学修目標
<ul style="list-style-type: none"> ・地域・在宅看護において療養生活、日常生活でありその生活を送るために多様な価値観やニーズをもっていることを事例から学び理解する。 ・療養者や家族の情報収集においても「看護」の視点だけでなく、医療・介護・在宅福祉など療養者とその家族と取りまく環境やそれぞれの立場の考え方や思いに着目し考える。 ・在宅療養者や家族へのコミュニケーションの実際を考え、看護者としてどのような言葉かけが必要となるか、配慮すべき点や対応のポイントについて学ぶ。 ・言語的コミュニケーションだけでなく、非言語的コミュニケーションによる観察の重要性や看護アセスメントの実際を想定して理解を深める。
コミュニケーション援助技術演習の事例紹介
<p>●事例A</p> <p>吉田太さん（仮名、70代男性）は脳梗塞後ある程度のリハビリテーションを行い、在宅療養となった。同じ年齢の妻と息子夫婦とともに自宅で生活をしています。息子夫婦は普段仕事をしているため、日中は妻と二人で過ごしている。リハビリテーションをしているが、右半身麻痺がありADLは部分介助が必要である。息子夫婦としては、昼間は老々介護になるためデイサービスなどを積極的に利用したいと考えている。</p> <p>しかし、太さんは「デイサービスなんて行きたくない。家で生活できるから十分だ」と利用を拒否している。太さんは身長180cm、体重85kgと体格がよく、妻が介助するにも限界があり、実際腰痛が出現している。息子夫婦は母親が大変だと思い、太さんを説得するが「だったら誰も世話をしなくていい。俺は一人で生活できる」と怒ってしまった。</p>
<p>●事例B</p> <p>西田敏夫さん（仮名）は60代の男性で、腰椎圧迫骨折後のリハビリテーション中である。調子のよい時は、少し起き上がることができるが、普段は多くの時間を和室の布団で臥床して過ごしていた。看護師は「介護用の電動ベッドがあれば敏夫さんが起き上がりやすくなり、臥床時間が減少するのではないかと。またご家族も腰に負担がなく介護しやすくなる」と考え、ご家族が不在の時に敏夫さんにベッドのレンタルを提案した。すると、「家族にとっても自分にとってもよさそうだ」と、敏夫さんは意欲的な反応であった。</p> <p>ところが後日、ケアマネジャーから、敏夫さんの家族より「看護師と看護学生が自分たちの仕事がやりやすくなるように無理やりベッドを勧めた」と苦情が寄せられたという報告があった。敏夫さんの家族は変更するか、もしくは今の訪問看護事業所との契約を解除して、別の事業所をお願いしたいとも伝えてきた。</p>
コミュニケーション援助技術演習の課題
<p>事例A・Bについて、生活の視点及び看護の視点をアセスメントしたうえで、どのようなことに配慮してコミュニケーションをとるか、またどのような情報収集をするかについて配慮したシナリオ(実演時間5～6分)を作成し、実演する。</p>

注1 コミュニケーション援助技術演習のグループワーク及び実演は事例が2パターンあるため、7～8人のグループ内でさらに3～4人でそれぞれの事例担当を振り分けた。

Ⅲ. 方法

1. 対象

2022年度前期の在宅看護演習を履修した3年生92名のうち、課題レポートの意見を収集することに対して同意の得られた学生の振り返りレポートの記述内容を対象とした。

2. 課題レポートの内容

課題レポートの内容は「ロールプレイ演習を通して学んだこと」「コミュニケーション援助技術演習を通して学んだこと」「今後の在宅看護実習を想定し具体的に学びたいと考えたこと」「演習全体を通して今後にかかせたいこと」の4項目について学生が自由記述するレポート課題とした。

3. 倫理的配慮

レポート課題の内容を収集するにあたり、学生に対して目的、方法、学生の自由意思に基づくものであること、同意しない場合も成績には影響を及ぼさないことなどを口頭にて説明した後、同意書を得て実施した。

Ⅳ. ロールプレイ演習およびコミュニケーション援助技術演習を通しての学生の学び

ロールプレイ演習およびコミュニケーション援助技術演習を通して学生が学んだことについて、振り返りレポートの内容を一部抜粋し、表4に示した。

1. ロールプレイ演習を通して学んだこと

ロールプレイ演習を通しての学びには、「療養者の生活スペースに入るため、服装や身だしなみ、マナーを守ることが大切だと学んだ」「看護師の価値観を押し付けるのではなく、療養者のライフスタイルを尊重することが大切だと学んだ」といった、療養者の生活を尊重する関りや訪問時のマナーに関する学びがあった。また、「療養者の生活に介入していく在宅看護の流れやイメージを持つことができた」という、在宅看護のイメージづくりに関する学びがあった。

2. コミュニケーション援助技術演習を通して学んだこと

コミュニケーション援助技術演習を通しての学びには、「言語的コミュニケーションだけでなく相手の表情をみて、何を意図しているか考えることが大事だと学んだ」といった非言語的コミュニケーションについての学びや、「家族と療養者で意見がすれ違っている場合は中立的な立場で話を聞くことが重要だと学んだ」「看護師が一方向的に話すのではなく、相手のペースに合わせて話を傾聴することが大切だと学んだ」といった話を聞く側の姿勢としての学びがあった。

3. 今後の在宅看護実習を想定し具体的に学びたいと考えたこと

在宅看護実習を想定して学びたいと考えたことについては、「療養者と信頼関係を築くためのコミュニケーションの実際を学びたい」「在宅療養に不安を抱えている家族への支援の実際を学びたい」「在宅療養を支える多職種やサービスの役割の実際を学びたい」といった、現場での実際を学びたいという考えがあった。また自宅療養のみならず、「病院から在宅へ移行する際の看護師の役割について学びたい」といった、療養の場への移行に伴う看護の役割を学びたいという考えがあった。

4. 演習全体を通して今後にかかせたいことなど

演習全体を通して今後にかかせたいことなどでは「実習で適切な振る舞いができるよう、日ごろからマナーを意識していく」「和室を使ったことがなく、マナーもよくわかっていないので調べて身に付けていく」とい

た、マナーを身に着けていきたいという意見があった。また、「同じ事例でもグループによって捉え方や関わり方が違ったので、様々なシチュエーションを想像できた」「グループワークでは自分の意見を言うだけでなく、他の学生の意見を聞き、異なる考え方を身に着けることができた」といったグループワークを行うことへの肯定的な意見があった。

表4 ロールプレイ演習およびコミュニケーション援助技術演習の振り返り (一部抜粋)

ロールプレイ演習を通して学んだこと
<ul style="list-style-type: none"> ・療養者の生活の時間軸があるため、訪問時間に遅れるときは事前に連絡し、謝罪することが大切だと学んだ。 ・療養者の生活スペースに入るため、服装や身だしなみ、マナーを守ることが大切だと学んだ。 ・看護師の価値観を押し付けるのではなく、療養者のライフスタイルを尊重することが大切だと学んだ。 ・訪問看護は毎日対象者の状態を観察できる訳ではないので、何を観察するかあらかじめ計画を立てて訪問し、経過の予測を立てて対象者に療養の仕方を説明する必要があると学んだ。 ・療養者の生活に介入していく在宅看護の流れやイメージを持つことができた。
コミュニケーション援助技術演習を通して学んだこと
<ul style="list-style-type: none"> ・自己決定を促すために、療養者と家族の思いを聞き出すコミュニケーションが大切だと学んだ。 ・家族と療養者で意見がすれ違っている場合は中立的な立場で話を聞くことが重要だと学んだ。 ・言語的コミュニケーションだけでなく相手の表情をみて、何を意図しているか考えることが大切だと学んだ。 ・対象者に質問されて分からないことは曖昧な返事をするのではなく、調べて後日返事すると伝えることが大切だと学んだ。 ・看護師が一方的に話すのではなく、相手のペースに合わせて話を傾聴することが大切だと学んだ。
在宅看護実習に向けて学びたいと考えたこと
<ul style="list-style-type: none"> ・療養者と信頼関係を築くためのコミュニケーションの実際を学びたいと考えた。 ・在宅療養に不安を抱えている家族への支援の実際を学びたいと考えた。 ・在宅療養を支える多職種やサービスの役割の実際を学びたいと考えた。 ・病院から在宅へ移行する際の看護師の役割について学びたいと考えた。 ・実習中の学生の態度や振る舞いについて学びたいと考えた。
演習全体を通して今後に生かしたいことなど
<ul style="list-style-type: none"> ・実習で適切な振る舞いができるよう、日ごろからマナーを意識していきたい。 ・シナリオを考えて実演することで、訪問看護のイメージが深まった。 ・同じ事例でもグループによって捉え方や関わり方が違ったので、様々なシチュエーションを想像できた。 ・グループワークでは自分の意見を言うだけでなく、他の学生の意見を聞き、新たな考え方を身に着けることができた。 ・和室を使ったことがなく、マナーもよくわかっていないので調べて身に着けていく。

V. 考察

1. ロールプレイ演習を通して学んだことについて

ロールプレイ演習を通しての学生の学びとして、時間やマナーを守ることの大切さ、療養者のライフスタイルを尊重することの大切さ、限られた訪問時間の中で看護を実践するために、訪問前から計画を立てることの重要性についての学びがあった。また、在宅看護の流れについてのイメージをつかめたという学びの報告があった。この結果は、荻野らが行った在宅看護演習における学生の学びに関する研究の結果と一致している（荻野ら、2016）。実際に学生が在宅看護実習で療養者の自宅に訪問する際にはマナーや療養者のライフスタイルを尊重する姿勢が重要である。また、療養の場での看護実践は時間や活用できる物品に限りがあること、療養者の家庭環境に応じて援助方法を工夫する必要があるため、訪問前から予測を立てて計画し訪問することが必要である。ロールプレイ演習を行ったことで、在宅看護実習の際に求められる態度や病院実習とは違った看護実践を考えることにつながったと考えられる。

2. コミュニケーション援助技術演習を通して学んだことについて

コミュニケーション演習を通しての学びとして、療養者の思いを引き出すことの大切さや非言語的コミュニケーションの重要性、家族と療養者で意見がすれ違っている場合は中立的な立場で話を聞くことの重要性、看護師が一方的に話すのではなく、相手のペースに合わせて話を傾聴することの大切さの学びの報告があった。この結果は小野らが実施した在宅看護演習の振り返りにおいても、学生によるコミュニケーションの実践が在宅看護のイメージにつながるということが報告されている（小野ら、2015）。在宅看護は、療養者の自宅療養に対する思いや生活スタイル、価値観を踏まえたうえで、個別性に沿った看護展開が求められる。そのうえで在宅看護を実践する看護師に欠かせないのがコミュニケーション力である。今回実施したコミュニケーション援助技術演習は、学生が考えたシナリオの元に実施したが、考え方や価値観の異なる2事例に対するコミュニケーションについて考えたことで、療養者や家族の価値観の多様性を受け入れ、尊重するといった在宅看護に求められる態度を学べたと考える。

3. 今後の在宅看護実習を想定し具体的に学びたいと考えたことについて

在宅看護実習を想定し具体的に学びたいと考えたことについて、療養者と信頼関係を築くためのコミュニケーションの実際、在宅療養に不安を抱えている家族への支援の実際、在宅療養を支える多職種やサービスの役割の実際といった、現場での実際を学びたいという考えがあった。また療養の場での看護だけでなく、病院から在宅へ移行する際の看護師の役割といった療養の場への移行に伴う看護について学びたいという考えがあった。この結果について先行研究による報告が見当たらないため考察に限界はあるが、看護実践能力育成における臨地実習の意義は、学生は、対象者に向けて看護行為を行い、その過程で、学内で学んだものを自ら実地に検証し、より一層理解を深めることとされている（文部科学省、2002）。ロールプレイ演習やコミュニケーション援助技術演習では、学生がシナリオを考えて作成するため、学生の考えの根本には、実際の場面ではシナリオ通りにいかないという認識があると推察される。そのため、対象者や家族と信頼関係を築くことの大切さや家族支援の重要性、多職種で在宅療養を支えていくことを具体的なイメージを持って知識づけるといった在宅看護実習での目標を考えることにつながったと考えられる。また、このことはシナリオを作成して行うということの限界でもある。学生がイメージを持って理解できるように在宅看護演習で工夫すべき内容について今後検討していく必要がある。

4. 演習全体を通して今後に活かしたいことについて

演習全体を通して今後に活かしたいことについてはマナーを身に付けていきたいという意見や、グループワークを行うことへの肯定的な意見があった。マナーについては、ロールプレイ演習を通して学んだことで考察したが、マナーを学ぶだけでなく、在宅看護実習にて療養者の自宅を訪問するにあたり身に着ける必要があると学生自身が感じたのではないかと考えられる。また、和室を想定したという意見は、ロールプレイ演習では和室を想定した環境のもとロールプレイ演習を行ったことが要因であると推察される。グループワークへの肯定的な意見について、西崎らが授業方法によって得られた学習成果について分析を行ったところ、グループワークを行った成果として、自分の考えを理論的に説明すること、多様な考えに触れることで相手の意見を受け入れられるようになることを報告している(西崎ら, 2008)。ロールプレイ演習およびコミュニケーション援助技術演習では、シナリオ作成のためにグループワークの時間を設けている。在宅看護で求められる看護には対象者の話に耳を傾けること、またサービスについてのわかりやすい説明が求められることを踏まえ、シナリオ作成のために学生同士で意見を交わし、相手の意見を聞くというやりとりの中で、自然と多様な価値観に触れ、他者の考えを受け入れるということが行われ、肯定的な結果につながったと考えられる。

VI. 今後の課題

在宅看護実習を想定したロールプレイ演習及びコミュニケーション援助技術演習を通して、学生が学んだことについて振り返りを行った。マナーや訪問看護師としての振る舞いや態度、コミュニケーションを図るうえで重要なことなど、在宅看護実習において重要なことを学んでいた。一方で、在宅看護演習での学びが、在宅看護実習での学びに影響しているかについては検討されていないため、今後は在宅看護実習を通しての学びおよび課題を検討し、講義・演習に反映していく必要がある。また、対象者を支える社会資源として多職種というワードが上がっているが、社会資源として抑えておくべきフォーマルサービス・インフォーマルサービスについての学びが乏しいことが窺える。新カリキュラムである「地域・在宅看護演習」に向けて、療養者の生活する地域での看護という視点を理解するためにも、社会資源に関する学びを充実するための講義・演習内容の検討が必要である。

本稿に関して開示すべき COI は存在しない。

VII. 文献

- 荻野妃那, 春名誠美, 豊島泰子 (2016). 在宅看護学における学生の学びの検討 ―演習を通して―. 四日市看護医療大学紀要, 9 (1), 35-40.
- 小野恵子, 小笠原映子 (2015). 在宅看護学教育演習プログラム評価. 日本地域看護学会誌, 17 (1), 30-40.
- 厚生労働省 (1996). 看護職員の養成に関するカリキュラム等改善検討会中間報告. <https://www.mhlw.go.jp/www1/houdou/0804/121.html> (2023年12月4日閲覧)
- 厚生労働省 (2007). 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書. <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf> (2023年12月4日閲覧)
- 厚生労働省 (2020). 保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部を改正する省令の公布について. https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00tc5425&dataType=1&pageNo=1 (2023年12月4日閲覧)
- 西崎未和, 菊池珠緒, 蓮井貴子 (2008). 在宅看護論演習における授業方法とその学習成果に関する文献検討. 川崎市立看護短期大学紀要, 13 (1), 11-16.
- 村山晃子, 榎原千佐子 (2020). 在宅看護実習における学生の学び ―テキストマイニングツールによる実習レポートの分析より―. 朝日大学保健医療学部看護学科紀要, 7, 48-51.

- 文部科学省 (2002). 臨地実習指導体制と新卒者の支援. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401c.htm (2023年12月26日閲覧)
- 山田雅子 (2022). 地域・在宅看護論. 看護と情報, 29, 3-8.